

ミャンマー訪問記

——意図的に「低開発化」されるということを考える——

中 村 忠 司

2017年6月26日～30日にかけて初めてミャンマーを訪問した。短い滞在ではあったが「発見」の多い5日間であった。皆さんは、ミャンマーについて何をご存知だろうか？ノーベル平和賞を受けたアウン・サン・スー・チー氏、映画にもなった『ビルマの豎琴』、国のシンボルというべき金色に輝く仏塔。私もそれ以上の知識はなく、往路の機内で根本敬（2014）『物語 ビルマの歴史』を半分ほど紐解いたくらいであった。

1. ミャンマー（ビルマ）についての基礎知識

正式には「ミャンマー連邦共和国」という。日本では「ビルマ」という名称でなじみ深いですが、1989年6月に当時の軍事政権は英語による対外的呼称を「Myanmar」に変更すると宣言、以来国際社会でも「ミャンマー」と呼ぶことになった。当然呼称変更には政治的な意図が含まれている。人口は5141万人（2014年9月、ミャンマー入国管理・人口省発表）で国土面積は68万km²と日本の約1.8倍である。首都はヤンゴンではなく、2006年10月に350km北に造られた町ネーピードーに遷都されている。民族は70%のビルマ族と134の少数民族で構成されていて、言語もそれぞれ違う。ちなみにビルマ語の文字はアルファベットのよう日本人が見慣れた形をしていないので、全く見当がつかない。宗教は、上座部仏教が9割近くを占めている。昔の教科書では小乗仏教と習ったが、これは大乘仏教からの見方にすぎない。世の中の多くの呼称は一方からの都合で使用されている。通貨はKyat（チャット）で、日本円とは1K≒0.1円の関係だが、USドル経由の両替になるので手数料はそれなりにかかる。しかも新札でないと交換してもらえない。

2. 空と陸からのヤンゴン（ラングーン）

ヤンゴン国際空港に行くには関西国際空港からだとはバンコク経由になるが、今回は成田国際空港から全日空の直行便を利用した。フライト7時間10分で現地時間の18時30分に到着する。時差は中途半端な2時間半なので日本時間の21時だ。機内は日本人が6割くらいだろうか。ビジネスマンやサッカーの選手も乗っている。最近ではLCCが多いのでFSCはさすがに楽である。往路は空からの風景を見たいので窓側の席を押さえた。空港の近くになると、予想外の景色が眼下に広がっていた。

我々は、最近思い違いをしている。中国の内陸部の都市に行っても、空港の近くになると新しいマンションが立ち並び、急速に都市化する地域を目にする。そのため、かつて首都であったヤンゴンの空港周辺も開発されていると思い込んでいたが、そこには緑の田園と曲がりくねった河、地平線の見える平坦な大地が広がっているだけだった。到着し、アライバルビザを申

請する。一向に進まない入国審査の列にいささかうんざりしながら並ぶ。本屋さんやスーパーのレジでも処理速度は日本の10倍近い時間がかかる。こういうことも誤解の一つと後から思うことになる。労働スタイルは世界共通ではない。

車でヤンゴンのホテルまで送ってもらう。当初の予定は、このままネーピードーまで車で行くはずだったが夜の道は危険なので朝から行くことに変更になったようだ。その理由は翌日はっきりと体験することになる。空港から市内へは1時間程度だが、道路周辺の街は暗い。電力不足が影響しているのだろうか、ネオンの看板もほとんどない。ホテルにチェックインして食事に出かける。タイ料理の店でビールを頼むと、“Myanmar”とラベルに書かれたラガービールが出てきた。その後もビールを頼むと、この銘柄がひたすら出てくることになる。美味しいし、冷えているのでいいけど。帰りは店からホテルまで歩いて行く。野良犬があちこちにいる。藤原新也の『メメント・モリ』で「ニンゲンは犬に食われるほど自由だ」の頁に出てくる犬と同じ顔をしている。頭を撫ぜたら噛みつかれる犬だ。なぜこんなに、ストリートドッグが多いのだろう。



写真1：平坦な下ビルマの地平線。



写真2：飲みやすいミャンマービール。

3. ネーピードーへの道

今回はほぼ自由時間がないため、早めに起きてヤンゴン最大の聖地「シュエダゴン・パヤー」というシングッタヤの丘にそびえたつ仏塔を散歩がてら見に行く。ホテルからは市民公園の前を歩いて15分くらいだ。公園は広大でランニングや太極拳をしている人も多い。野良犬にパンくずを与えている女性がいる。仏教国なので殺生に厳しく、施しの精神なのだろうか。確かに人も犬も敵対している様子はなく、普通に共存している。日本ではすぐ保健所に連絡されるだろうけど。仏塔はでかく、東西南北に門があり中に入ることができる。入口の階段で靴も靴下も脱いで中に入ると、大理石が冷えていてはだしの足に気持ちがいい。小豆色の僧衣を

きたお坊さんが普通に歩いている。京都を思いだす。ただしこちらの僧侶は一切の経済活動を行わないし、戒律も厳しい。京都のようにスナックで舞子さんと飲むことはない。



写真3：金色に輝く仏塔シュエダゴン・パヤー。



写真4：常に見かける僧侶。敬われている。

ネーपीドーまではハイウェイを使って車で6時間かかる。ホテルからは大渋滞の中を空港の近くまで戻って高速に入るのだが、途中大きなマーケットの横を通過する。たくさんの屋台が立ち並んでいる。服や本も売っていて、ミャンマーではほぼすべてのものが屋台で手に入るらしい。高速道路は日本のように高架になっておらず、地べたを道路が北に一直線に伸びている。そのため人は歩いているは、水牛は横切るは、バイクは逆走してくるはとかなりデンジャラスである。しかもコンクリートがデコボコでひたすらバウンドする。照明もないので“夜走る＝死ぬ覚悟で走れ”となる。太陽はここでも偉大だ。

2時間ほど走るとドライブインがあり、休憩する。入口には様々な目的の寄付の箱が置かれていて、お札がたくさん入っている。ミャンマーで感心したのは、ドネーションが国民の文化として根付いていることだ。僧侶は人々の喜捨で生活している。国民の多くを占める在家信徒は功德を積む行為として協力する。人々は貧しくとも優しい顔をしている。寄付の対象は、環境問題や市民活動、アウン・サン・スー・チー氏率いるNLD（国民民主連盟）の活動など多様である。屋台では、南国らしくマンゴーやランプータン、マンゴ



写真5：さまざまな目的の寄付BOX。

スチン、ドリアン、バナナなどが売られている。どれも味が濃く美味しい。

4. 広大な新首都と少数民族

ネーピードーとは **Royal City** という意味で新しく造られた人口の町である。旅行者の訪問が可能になったのは **2012年6月末** からで、ホテルは小ぶりだがたくさん建てられている。道路は一部 **24車線** あり、滑走路としても使えるし、パレードもできるように造られている。国会議事堂や中央省庁が集まっているが、広大すぎて人の気配は少ない。車もほとんど走っていない。沖縄のようにブーゲンビリアやデイゴの赤い花が道路わきに咲いている。打ち合わせを数回したが、女性の社会進出はきちんとできているなど感じた。男女とも小綺麗なロンジーという巻きスカートを穿いている。常に蓋つきのマグカップに入ったジャスミン茶と甘いコンデンスミルクの入ったコーヒーが出てくる。嫌いではないが、ブラックコーヒーがやはり飲みたくなる。

ホテルにチェックインして、食事に出かける。少数民族のカチン族のレストランらしい。竹のざるにヤシの葉を敷いて、真ん中にライス。周りにチキンや野菜の炒め物が盛られている。昔パプアニューギニアで食べた土の中で焼いた石で蒸し上げるタロイモやチキンの味を思い出す。タイ料理と比べるとミャンマーの料理はどれも我慢のできない辛さは無く、長粒種のインディカ米も小魚のふりかけやあらゆる種類のカレーを少し混ぜながら食べると美味しい。カチンは北部の山岳民族である。中国との国境近くのカカーボラージ山は **5881m** の標高を持つ。戦闘部族としても知られているが、働いている男女は子供のようにかわいい。



写真 6：カチン族の料理。右上はひまわりの種。

5. 「低開発」に開発されるということ

ミャンマーの歴史は侵略の歴史でもある。最初の侵略はモンゴル軍（元）による侵入で、パガン王朝は事実上滅んでいる。元の衰退後、タウングー王朝期にはタイのアユタヤに侵攻し、領土を拡大する。領土拡大は一方で同様に植民地拡大を図るイギリスとの紛争に発展する。

19世紀初頭に3度の英緬戦争にやぶれたビルマはイギリスの植民地となる。根本（2014）によると、第2次英緬戦争後ミンドン王が内陸部のマンガレーに遷都し近代化に着手する。日本の明治政府が殖産興業で富国強兵を目指したように、国营の織物工業や武器製造工場、造船所など建てフランスやドイツの技術者を指導者に近代工業化を進める。また、多くの若者を留学生として海外に派遣している。しかしながら、この近代化は失敗する。

下ビルマが英領ビルマとなり、そこを經由してヨーロッパ産の安くて質のいい工業製品が次々と流入してくる。関税をかけることを認められなかった内陸部のビルマでは価格と質の競合に勝てず、工業化は頓挫してしまう。また、主食の米も自給するに足らず、生産量の多い英領ビルマからの輸入に頼らざるを得なくなる。内陸部からは農民が英領ビルマに出稼ぎに行き、やがて借金などにより定着するようになる。ビルマはただ土地を奪われただけでなく、米という当時の世界商品を押さえられ、都合のいい消費地としてコントロールされていく。

米は、英領ビルマ最大の輸出商品である。ただその使用先が問題でもあった。ビルマ米は当初イギリスに運ばれ、西アフリカやカリブ海諸島の食料として精米され輸出された。またイギリス国内ではパンを買えない貧困者労働者の食料として安く販売された。つまり味はどのようにもよかったのである。そのため、日本の米のように味を追求し市場競争力を高める品質開発は行われなかった。I. ウォーラーステイン（2011）『近代世界システム』にあるように途上国は怠けていたために先進国レースに遅れたのではない。当時のヘゲモニー国家により“低開発に開発された。”のであり、そのシステムは現在でも生き続けている。個人的には好きなビルマ米（昔よりはきっと美味しくなっているであろう）を毎日食べながら、そんな考えを巡らす出張であった。

参考文献

根本敬、2014、『物語 ビルマの歴史』、中公新書

I. ウォーラーステイン著、川北稔訳、2013、『近代世界システム I』、名古屋大学出版会